Policy Topics

学部研究会報告「ウィキペディアとどうつきあうか～日本語版管理者の現場と経験から～」[1]

How to get along with Wikipedia : from a view point of Japanese Administrator

山田 晴通[2]

Harumichi Yamada

本記事は、2014年11月14日に行われた学部研究会「ウィキペディアの記事はこうして作られる」(講演者：山田晴通氏)の講演にもとづき、その要旨をまとめたものである。

ウィキペディアとは？

すでにご存じのことと思いますが、ウィキペディアはインターネット上の百科事典です。ある事柄について、グーグルなどでネット検索すると、かなりの確率でウィキペディアの記事が上位にヒットされます。そのため、学生のレポートや地方自治体などの職員が書く報告書などによく使用されます。学生がウィキペディアの記事をコピペしてそのままレポートを作成するという困ったこともありますが、ウィキペディアは、日常、多くの人に、普通に使われているツールです。

ウィキペディア管理者とは？

私は2009年春からウィキペディアの記事の編集をしています。つまり、使う側から作る側に回って5年です。2011年12月からは、日本語版の管理者もしています。管理者とは、アパートの管理人のようなもので、苦情処理など、ウィキペディア運営上で発生するさまざまな雑用を行う係です。管理人は全員無給のボランティアで、やりたい人間が勝手にやっているという点では、一種のおせっかいとも言えます。現在、ウィキペディア日本版には90万以上の項目がありますが、管理者は50名あまり、アクティブにかかわっているのは20名あまりです。

ウィキペディアは信用できるか？

ウィキペディアは多くの人が使っていますが、システムの運営方法を理解している人は多くはありません。その結果、ウィキペディアの記述をそのまま信用する人が多すぎるというのも事実です。2011年に報告された調査によると、高校生ではウィキペディアを信用できると考える人の比率が高く、大学生になると下がります。図書館司書コースの受講者では、半数にのぼる人々が、ウィキペディアの記事のなかに信用できないものがあったと回答しています。つまり、信用できない記事に気づくのは、情報を信じてよいかどうかを自覚的に考える人に多いということです。この調査結果は、メディア・リテラシー、つまり、情報を批判的にみるという態度、与えられた情報に何かおかしいことがあるのではないかと気づく力を持っていなければ、ウィキペディアに振り回される可能性があるということを示しています。

1　本稿は、2014年11月14日(金)本学神戸三田キャンパスで行なわれた講演録に加筆・修正したものである。

2　東京経済大学コミュニケーション学部教授、日本語版ウィキペディア管理者

ウィキペディアの記事の成り立ち

ウィキペディアは、紙で作るメディアと全く違う前提で成り立っていることが特徴です。ウィキペディアでは、誰もが記事を作ることができ、誰もが記事を書き換えることができ、誰もが記事をめぐる議論に参加することができます。

従来の百科事典の編纂は、編集部が方針を作ることから始まります。項目やその重要度を設定し、項目をたてるかどうか、その項目にどれくらいの紙面をあてるかを決定し、専門家に執筆を依頼します。これに対して、ウィキペディアでは、ネットアクセス環境さえあれば、誰でも、また匿名ででも執筆できます。全体からみた項目の配分を決めていないので、ある分野の項目を百科事典に載せたいと思う人が多ければ、その分野の記事の配分が多くなります。たとえば、日本語版は、アイドルの記事、アニメの記事、AV女優に関する記事が充実しているといわれています。

また、悪意を持って記事を書き込む人もいますし、善意でやっていても誤りを書き込む人もいます。編集の基本方針は、「誰が書いても他の誰もが書き変えることができる、ゆえに良いものができるだろう」という性善説にたっています。しかし、このやり方で最善の状態になる保証はありません。そのため、記事の改善を誘導するいくつかのルールが策定されています。

「ノート」タブ

ウィキペディアのページを開くと、左上に「ノート」というタブがあります。この「ノート」は、問題をはらむ記述をみつけた人がコメントを自由に書き込める場所です。この「ノート」タブを開くと、当該記事をめぐって行われた議論の記録を見ることができます。議論を公開することによって、記事の誤りが少しずつ訂正されることを期待して設けられたページです。書き込みのあるタブは青色になっています。

「ノート」では、ある価値観を持って書かれた記述が、別の価値観から編集され、それがまた編集しなおされるという編集合戦が起こることもあります。たとえば、ある人に関して「非常に立派だ」という記述があるとします。一方で、その表現は誇大であると削除しようとする人がいます。実際、粘り強く時間をかけて書き込む人の意見が通りやすいということはありますが、とくに関心がない人も意見を書き込むことができます。自分の意見が劣勢だと思った人が、自分と同じ意見を持つ人に発言してほしいとコミュニティに訴えることもできます。呼びかけに応じて、普段この記事を見ていないけれど、「こちらの方がよいと思う」という書き込みもできます。

政治的立場によって価値判断が違ってくる場合などは、論争的な内容になります。また、「こんなマイナーなタレントの記事はいらないのではないか」という書き込みもあります。「ノート」を見ると、いろんな人が参加して議論がなされたことによって、論点がとりまとめられ、記事が変わってきていることが理解できます。

このように、どういう記事が妥当なのかという議論は「ノート」で行われ、そこで合意ができると、本文の記事に反映されます。「執着心が強い人の考えが通るのではないか」という疑問がありますが、ある特定の人々が記述を残すべきだと固執しても、記述を削除すべきだという意見が多数あれば、管理者が介入して対処することもあります。

意見調整が行われている間は、問題のある記述が残る可能性もあります。しかし、その場合でも、コミュニティとして記事改善の努力が常に行えるようになっています。

「履歴表示」タブ

記事本文ページの右上には「履歴表示」タブがあります。このページには、いつ、誰が、どのように編集して、現在の記事になったのかが記録されています。人権侵害が含まれる記録は見ることができないようになっていますが、基本的には、「履歴表示」で過去の記述を復元して読むことができます。元の記事が少しずつ改善されて現在の形になったこと、ある記述を記載するか削除するかをめぐって議論がずっと行われてきたことなどもわかります。

履歴がない記事は、当初の記事に改善の必要がなかったとも考えられますが、長期間にわたって顧みられなかった結果、最初の記事がそのまま残っている場合もあります。一般に、一つの記事に対して複数の人が関与していれば、記事の信憑性は高まりますが、短期間に履歴が多数存在する記事でも、単に編集合戦が行われ乱暴な編集が集積された結果である場合もあります。編集が頻繁に繰り返された理由は、「ノート」を見ればわかるので、「ノート」と「履歴表示」は、記事の信憑性を判断する材料として有効です。

「編集」タブ

「履歴表示」タブの横には、「編集」タブがあります。このタブを開くと、今すぐにでも記事を書き換えることができます。「荒らし行為」とよばれる、いたずら的な編集が多い場合は、管理者が「保護」をかける、すなわち利用者としてきちんと登録した人以外は編集できないようにすることがありますが、基本的に編集は自由です。編集を行うには、ウィキペディアの言語を使わねばなりませんが、直観的に習得できるようにできていますから、慣れれば難しくはありません。

このように、ウィキペディアへの書き込みはあらゆる人に開かれています。にもかかわらず、作る側に参加しようとする人は多くありません。しかし、良い記事にするには、少しでも多く人に記事作成のプロセスに参加してもらい、より多くの人の支持を得ることが望まれます。

編集の3つのルール

記事の信憑性を保つ目安として、ウィキペディアは3つのルールを設けています。

まず、「検証可能性」のルールです。ウィキペディアの記述については、検証可能性を満たすため、出典が記されていなければなりません。ある記述が事実であるかどうかよりも、客観的に信頼できる情報源にもとづいているかどうかが、最も優先される指標となります。たとえば、「XはYの父親である」という記述があったとします。この記述が仮に事実であったとしても、信頼できるソースにそう書いてある、つまり、この文献のこの場所に、あるいはこの日付のこの新聞に書いてある、という根拠が示されないかぎり、単なる噂であるとみなされます。

ただし、ウィキペディアに書かれているすべての記述が検証可能性を満たしているかどうかは危ういところです。記事を作っている人々の間でも、どれくらいきちんと出典をつけなければならないかという点に

関して、感覚の違いがあるからです。信頼できる第三者による文献を一冊か二冊あげておけば、個別の記述にそれぞれ出典を付ける必要はないと考える人もいます。一文一文に対して出典が明らかにされていなければ、記述を除去すべきだと考える人もいます。では、どこで折り合いがつくでしょうか？　具体的な個別の記事について、ある人が「この記述は出典を明記してください、参考文献はあがっているけれど、どこの何ページに書いてあるかを明記してください」と注文を付ける場合があります。注文をつけられれば、出典があきらかにされる可能性があります。一方で、粗雑な記事であっても、注文をつける人がいなければ、それはそれでよいということになります。[3]

編集に参加して、より良いウィキペディアに

ウィキペディアの記事を見て、この記事は信用できないと思ったら、放置するのではなく、出典の明記などの注文をつけてください。注文をつける人がいれば、その記事を改善しようとする人が出てくる可能性があります。記事の編集に一度かかわると、その記事を誰かが加筆あるいは削除した場合、「ウォッチリスト」に知らせが入ります。たとえば、私が記事を書いた場合、それを誰かが編集すると、私の「ウォッチリスト」に表示されます。誤りが書き加えられたと思ったら、再度、自分で編集し修正することができます。このように、編集が加えられると、編集にかかわったすべての人の「ウォッチリスト」に連絡が入るので、注文に反応できる人が、通常、何人か生まれることになります。

単に、「ウィキペディアは信用できない」と言うだけでは、ウィキペディアの記事は改善されません。勉強していただいて、どんどんコメントを入れてもらえたら、どんどんウィキペディアが良くなっていく可能性があるのです。

政治へのコミットメントとウィキペディアへのコミットメントは似たところがあります。多大な情熱を持った少数の人だけが専属的にかかわるのではなくて、ぬるい情熱を持ったより多くの人がかかわる部分が増えれば増えるほど、政治もウィキペディアも良くなります。「一部の人が勝手にやっていて、そして偏りがある」というのではなく、多数の人がそれぞれの情熱でかかわることで、より良く改善された、バランスのとれた百科事典に近づいていけるのではないかと思います。

専門家のなかには、ウィキペディアに対して感情的に反応する人もいます。しかし、ウィキペディアは百科事典ですから、どこかに書いてある、既存の情報を信頼できる形にまとめているだけです。これまで、百科事典の執筆や編纂は、専門家にとって業績の一つだとみなされる慣習がありました。しかし本来、専門家の仕事は新しい知識や知恵を発見しまとめていくことですから、百科事典の多くの項目を執筆したからといって、研究者としての評価が上がるわけではありません。「紙の辞書は、書いている人の信用性によって、読み手はその内容を信じる。他方、ウィキペディアでは、執筆者の信用性が問題になるわけではない。信

3　二点目は、「中立的な観点」というルールです。「中立的な観点」とは、ある特定の観点を推進したり、ある特定の観点を除外したりしないということです。ウィキペディアの目的は、さまざまな信頼できる情報源から、情報を明確に、正確に伝えることです。

三点目は、「独自研究は載せない」というルールです。これは、第一点目に関連しますが、ウィキペディアの記事は、信頼できる媒体において、その記事の主題に関連する形で、既に発表されていなければならないということです。

頼性の基準は、そこで引用されている出典だ」という人もいます。

ウィキペディアは匿名でも参加できますし、そのやり方はウィキペディアのなかで具体的に学び取ることができるようになっていますから、できるだけ多くの人に参加していただいて、ウィキペディアをより良い百科事典にしていきたいと思います。

（報告文責：山中速人）